

昭和35年10月15日

三宮駅前に華々しくオープンした

神戸新聞会館――

その1階の「秀品館」の一角に

田崎真珠の小売店第一号である

「田崎真珠店」が開店した

しかし「高価な真珠がはたして

日本で売れるのだろうか」

「小売店は手間がかかる割に

利益が少ない」――

社内ではそういった消極的な

意見もささやかれた

海からの贈り物・真珠とともに生きる

# 日本の真珠王

● ~King of Pearl~ Syunsaku Tasaki Story

## 田崎俊作物語

〈第九話〉

漫画：佐藤晴美





当時、日本の真珠の  
約90%が外国人バイヤーによって  
買われ海外で製品化されて  
売られていた。

日本でも  
真珠を売るためには  
何が必要か

田崎は真珠の養殖から加工  
販売までの一貫メーカーとして  
最終的な消費者のニーズを知り  
応えることが重要だと考えていた

田崎真珠の真珠取り扱い量が増えるにつれ、加工場の増築も必要となった

狭い事務所に  
営業と加工場とが  
一緒になっている

これでは増え続ける業務に  
対応できない



——成長する  
若いエネルギーを  
狭い事務所に  
閉じ込めておくのは  
経済的にも  
マイナスではないか

そうだな  
これからどんどん  
大きくなる世界の真珠  
市場に対応するためには  
経営を組織化することが  
必要だろう



海外視察後  
優秀な人材が必要と  
考えた田崎は大村中学や  
海軍兵学校時代の友人に  
声をかけともに働いてもらい  
何でも相談した

そこでだ——  
新しい土地を見つけて  
新しい加工場を  
建てようと思う

おお

なるほど





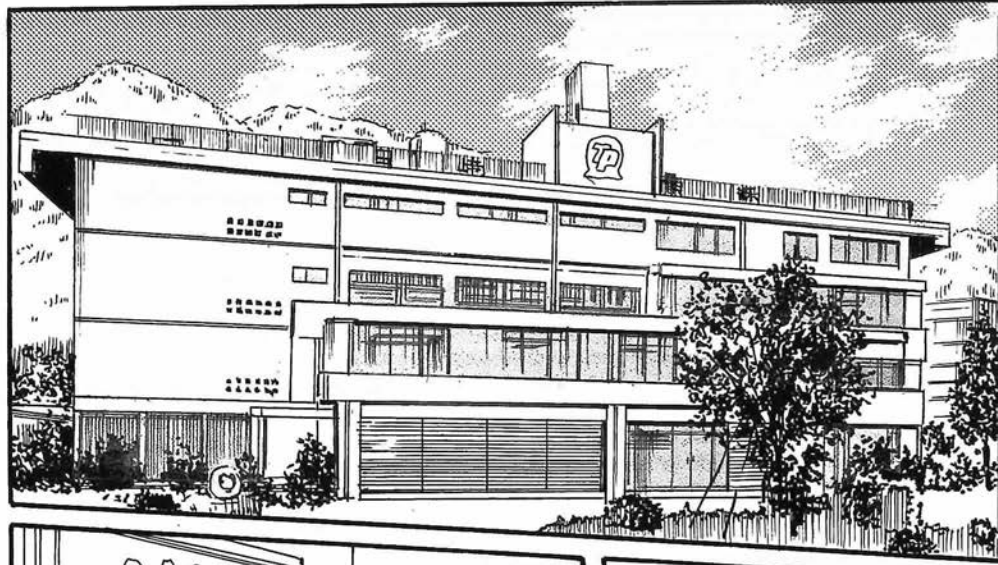


神戸は——  
真珠を選別するのに  
とても良い場所なんだ

光が  
やわらかい

六甲台の新工場は  
昭和38年に竣工した





田崎真珠の新工場は  
真珠の選別・加工を合理的に  
行うために慎重に設計された



新工場は注目を集め  
高松宮妃殿下  
トンガ王国皇太子など  
多くの人々が見学に訪れた

この工場には  
開設と同時に研究室が置かれ  
真珠を加工するさまざまな工程の  
機械化への研究が行なわれた

珠に穴をあける機械は  
田崎真珠のオリジナルである  
—— 真珠の大きさを  
ふるいわける機械など  
現場の声を取り入れて  
工場内のほとんどの機械が  
独自のものとなった

田崎の構想は次々と実現し  
田崎真珠は大きくなる  
真珠市場に対応していった



田崎真珠は  
オープンする  
1年前から  
ミス・ユニバースの  
協賛事業を  
行なっていた



それは田崎の夢に  
関連していた

こんな逸話がある

私は以前から  
「世界一の美人に  
おれが作った真珠を  
プレゼントしたい」  
そんな宝石業界の  
VIPになつてみせるという  
夢があったんですよ



それなら  
世界一の美人に  
プレゼントする前に  
ぜひ日本一の美人に  
真珠をプレゼント  
してください！

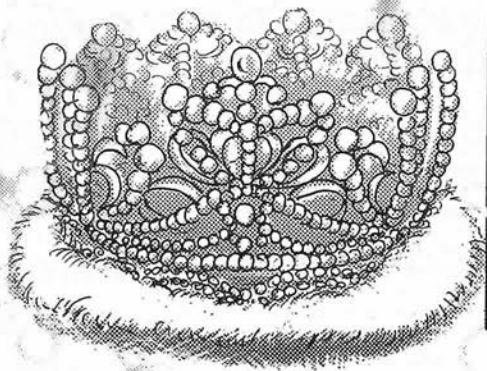
え？

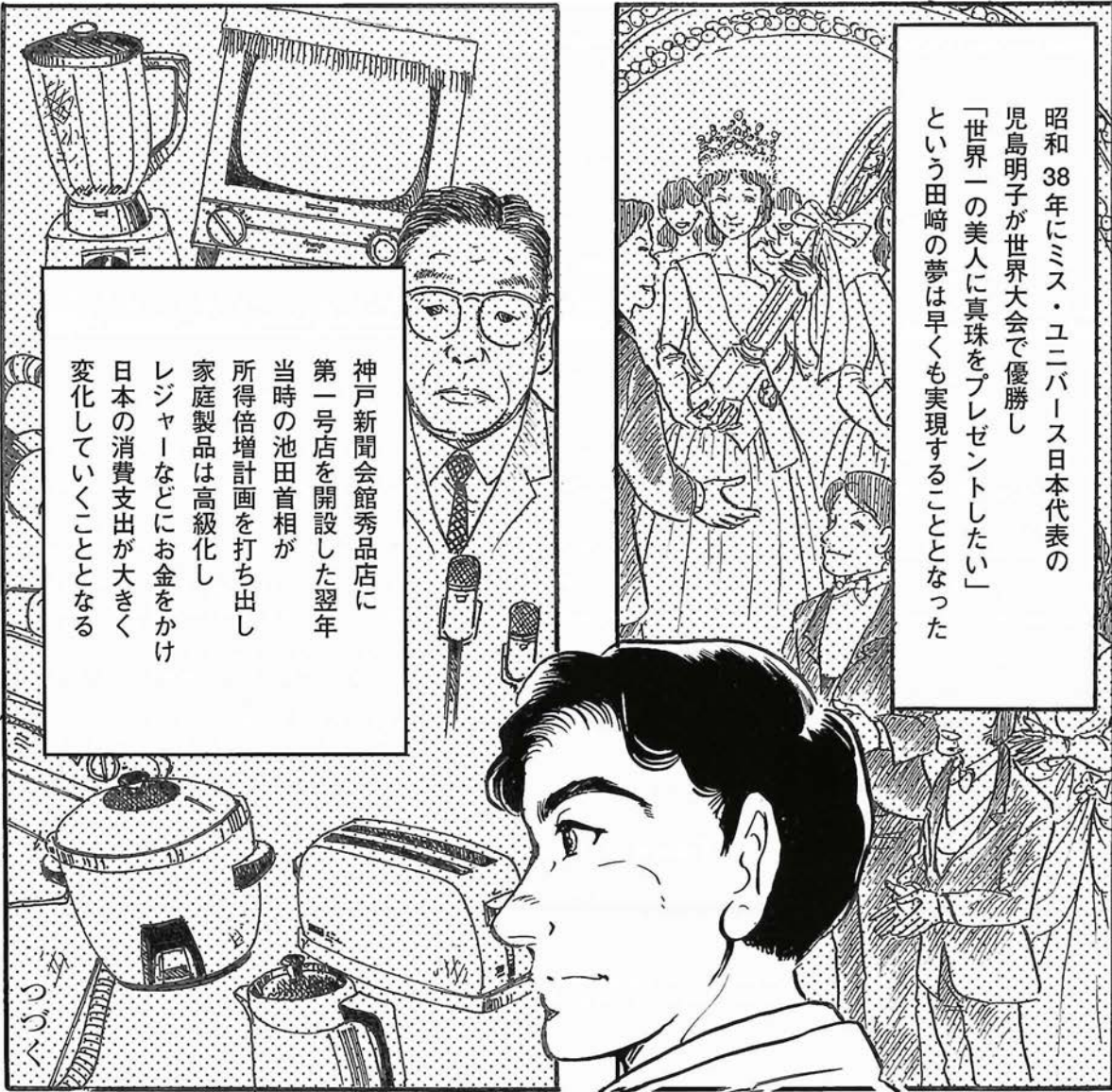


日本一  
——  
フム



——そして  
ミスユニバース  
日本代表の頭上には  
田崎真珠の王冠が  
輝くこととなった





昭和38年にミス・ユニバース日本代表の  
児島明子が世界大会で優勝し  
「世界一の美人に真珠をプレゼントしたい」  
という田崎の夢は早くも実現することとなった

神戸新聞会館秀品店に  
第一号店を開設した翌年  
当時の池田首相が  
所得倍増計画を打ち出し  
家庭製品は高級化し  
レジャーなどにお金をかけ  
日本の消費支出が大きく  
変化していくこととなる



# 看板

出石 アカル

絵 菅原 洸人

題字 六車 明峰

「ひさしを貸して母屋を取られる」という言葉があるが、わたしがそれだ。

喫茶『輪』は、20年前にオープンして以来、二度店舗を拡張している。

最初は客席わずか11の小さな店だった。

それまでわたしは米屋をしていた。木炭、練炭、豆炭（なつかしい商品名だ）なども扱っており、それを在庫するための倉庫が隣接していた。それが時代の流れで不要になり、改造して喫茶店にしたのである。

当初は家内が友人一人に手伝ってもらいながら営んでいたのだが、すぐに手狭になり、米屋の一部を譲ってやった。

それから数年するとまた、喫茶店のお客さまがあふれるようになってしまった。

わたしはついに決断。米屋を廃業して明け渡し、マスターとして家内に雇ってもらうことにした。

見事に「ひさしを貸して母屋を取られ」たのである。

そんな事情もあって『輪』はスペースが二つに分かれている。狭いころの暖かみのあるイメージを壊さないように工夫して拡張したからだ。

店に入った所の感じは以前と変わらない。しかし奥へ行くと別のスペースがある、という仕掛けだ。初めてのお客さまは「アレッ」という顔をされる。思いのほか広いんだ、と。

そこに、水彩、版画、油彩などの小品十数点を飾っている。すべて菅原洸人さんのおしゃれな作品だ。昼食時以外は、ちよつと上品な落ち着いた場所である。静謐と言っている。休日にわたしはそこで一人、文章を作る。ぜいたくな話だ。

\* \*

「おもしろいものを作ってきました」とやって来られたのは洸人さん。

大きな袋からソロリと取り出されたのは、『輪』の看板だった。入り口のタイル壁にかけるようにと。

タテ 35 cm ヨコ 44 cm の分厚い木の板の真ん中にコーヒークップが描かれており、その両側には、なんとわたしと家内の似顔絵が描かれている。それがあまりにも似ていて、妙な気分。と言っても写真のような絵ではなく、なんともほのぼのとしていて、わたしは思わずニンマリしてしまう。

あの田辺聖子さんのご自宅の地下室は飲み屋風になっていて、そこには似顔絵看板があると聞く。

カモカのおっちゃんが元気なころは、いつも常連さんで賑わっていたのだと。

田辺さんの本、『おせい&カモカの昭和哀惜』（文春新書）を最近読んだのだが、そこにその看板の写真が載っていて、表裏にお聖さんとカモカのおっちゃんの似顔絵が描かれている。

「次の店へいこう！」と、ひとりが叫ぶと看板は裏向けにされるのだと。『バーカモカ』から『スナックお聖』に。それがなんとも愛らしい絵で、コレいいなあと思っていた矢先だった。

洗人先生、『輪』のために、それに負けない看板を作ってきたのだと。お願いしていたわけではない。願いが通じたとは思えない。

店頭のタイル壁には、素人ではクギが打てない。幸い常連さんにタイル職人さんがおられる。頼むと快く工具を持って来てフックを取り付けてくださった。

店頭が明るくなった。いやでも目につく。少し照れ臭い。

入って来られたお客さまが、まじまじとわたしの顔を見て、「似てるなあ！」とうなっている。なかには「プッ」と吹き出す人も。

さて、タイル職人の丸豊さん。年よりもお若く見えるが、実は55歳。やさしそうな童顔で、いかにも女性にもてそうな人だ。



「年の暮れに飲みに出て、家に帰ったら、後に首相にならった小淵という人が『平成』と書いた大きな紙を持ってテレビに写ってはった」と話す人。昭和から平成へ二代に渡って飲み歩いていたという兵である。

「あのころ、うちの子はぼくのこと、えらい働き者やと思ってましてん。いつも仕事ばかりで、ほとんど家におらへん。正月でも仕事してるとばっかり思てましてん。偉い父ちゃんやなど。虹色のアワが消えてからは

おとなしなって、今ではもう、休みの日は孫の遊び相手してます。夏はトンボや蝉やカブトムシ取りに連れて行ったり。そやけど、この子が大きくなったらまた、一緒に夜の昆虫採集にも行ってみたいなと思わんこともないけどね」

この丸豊さんが座る席は、奥の静かなスペースではなく、多くの常連さんが好む入り口近くのにぎやかな席である。

ところで看板である。

さすが画伯、一応女性である家内の顔は少し若めだ。「看板に偽りなし」というには、ちょっとビミョー。

■出石アカル（いずし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コヒ」「カブの耳」（編集工房「ア刊」にて、二〇二〇年度第三十一回フルーメール賞文学部門受賞）。



《神戸異人館物語》

夜明けの

ハンター



ハンター肖像

昇り竜

明治四年一月一日、エドワード・ハズレット・ハンターと平野愛子との間に生まれた赤ちゃんは男の子だった。ハンターに似て目鼻立ちのきりりとしたかわいいい赤ちゃんである。

「オ父サン、名前ヲ付けテ下サイ」

ハンターが常助に言った。

「私に名前を付けさせてくれるのは、大変嬉しいが、ハンターさん、あなたの血を分けた子供です。しかも、日本に命を預けたあなたの大切な子供です。あなたの想いもこの子に託しましょう」

常助は共に名前を考えることを提案した。



三条杜夫

絵・谷口和市

「愛子ガ産ンデクレタベイビーデス。愛子ノ意見モ聞キタイ」

レディーファーストの国に生まれたハンターらしい対応である。愛子は答えた。

「丈夫で大きく育ってくれるような名前がいいです」

日本には男の子を象徴する太郎という名前がある。それに加えて、ハンターならではの想いを付け加えたいとハンターは考えた。

「私ノ名前ノハンターハ、狩人トイウ意味ガアリマス。狩猟民族ノヨーロッパデハ、色々ナ狩猟ヲ

シマス。デスガ、絶対ニ狩ルコトノデキナイ動物ガアリマス」

遠巻きにハンターや愛子、常助らの様子を伺っていた番頭や丁稚たちが興味深い面持ちで身を乗り出す。

「絶対に狩ることの出来ない動物？ わかるか？」

「虎か？」

「馬鹿をお言いでない。虎は加藤清正が退治した。狩ることが出来るゾ」

「うーん、何だろう？」

番頭や丁稚たちが真剣に考え抜く姿を横目に見ながら、ハンターが言う。

「ドラゴンデス。日本ノ言葉デ言エバ、竜デス」

「竜ですか？」

常助が目を輝かせる。

「竜はいい。夢の動物だが、縁起のいい動物だ。昇り竜は特に勢いがあつて最高のものだ」

愛子も目を輝かせる。

「竜をこの子の名前にしましょうか？」

ハンターがうなづく。

「ドリームノ動物、竜ト日本ノシンボルのネームヲプラスシテ竜太郎トイウノハドウデスカ？ オ父サン」

常助が手を叩いて喜んだ。

「竜太郎か？ これはいい！」

家中から拍手がわき起こった。

騒ぎを聞きつけて菊子が顔を見せた。ハンターが言う。

「オ母サン、ベイビーノ名前、竜太郎デドウデシ

ユウカ？」

「竜太郎、ですか？」

聞き入れて、すぐに

「いいですねえ、強い男の子に成長してくれそうで、とてもいい名前ですねえ」

と菊子は満足げである。

「オ母サンガ了解シテ下サレバ、竜太郎ニ決メタイト思イマス」

そこでまたもや、座敷中に拍手が起こる。かくして、ハンターの第一子の名前は竜太郎と決定した。この子がのちに日本国籍を得て、範多という苗字を考案し、範多家を興す。この時点ではまだ戸籍制度は日本に存在しておらず、名前を公に登録する必要もない。

一般に名前を付ける風習は室町時代にめばえ、宗門別帳や寺の過去帳に庶民の名前を記録するなどしてきたが、明治四年四月に太政官布告として戸籍法の制定を発表し、翌五年から実施される。この年がひのえさるの年であつたことから壬申戸籍と呼ばれるようになる。竜太郎は壬申戸籍のうちでは平野竜太郎として登録され、成人して自身で範多家を興すまでは平野竜太郎として通す。このようにやつと戸籍制度が作られようとしている時代であり、英国人のハンターが日本の戸籍に登録する制度もなく、ハンターと愛子の結婚は今にいう戸籍上の結婚ではなく、実質の結婚であつた。しかも、ハンターと愛子の国境を越えた結婚は日本における国際結婚第一号として記憶されていく。



学からいっても噂は派手な方がよい。

「竜ヲネーミングニ利用シタコト、OKデシタ」

と自分のビジネスパートナー、ハンターの名前の付け方に上司として後日、大いに満足するキルビーであった。

愛子の産後の体が落ち着くのを待って、ハンターは愛子と共に、竜太郎を連れて兵庫に戻った。しばらく経って、キルビーが竜太郎のお披露目パーティーを催してくれた。居留地十四番館が久しぶりに活気に満ちあふれるのであった。キルビーの呼びかけで集まったのは、米田講師、留吉、タネ、稲次郎、それに秋月。誰もが我がことのように喜んでくれるのだった。

このころの日本の人口は三千四百万人ほどであった。ちなみに江戸時代初期の人口はわずかに千五百万人。江戸末期に三千万人となり、明治五年の壬申戸籍が出来たころには三千四百八万人と記録されている。

ここで参考までに日本の人口の変遷について記させていただくと、奈良時代には日本の人口はわずかに四百五十万人程度であったといわれている。平安時代は五百五十万人。慶長時代（一六〇〇年）に千二百二十万人となり、江戸時代に三千万人を越えた。明治末期に五千万人を越え、昭和十一年には江戸時代の倍の六千九百二十五万人に増加している。戦後の人口増は著しく、昭和二十三年に八千万人となり、同三十一年には九千万人となり、同四十二年に一億人を突破した。そして平成十五年、一億二千七百六十万人と記録されて今日に至

竜太郎の誕生は平野家にとってこの上もない喜びであった。

「一度は死にかけた愛子が、こんな元気な男の子を生んだのだからなあ」

常助が感慨ひとしおになるのも当然である。

「素晴らしい名前も決まってこれほど目出度いことはない。命名祝いの膳じゃ。番頭さんも丁稚たちもみんなで祝っておくれ」

常助が屋敷じゅうのみんなに祝いの膳を用意した。黒鯛・チヌの尾頭付きが分けへだてなく、みんなにふるまわれた。

「大阪湾・チヌノ海ニ泳グ魚デスネ」

ハンターが感動した。五年前、初めて兵庫にやって来た時、身を寄せた大工の留吉の家で、タネが祝いの膳に用意してくれた魚である。横浜から兵庫に移って新境地を開き、妻帯して、今、二世まで持てた。誰よりも喜びを噛みしめているのはハンター本人であった。我が子出産の祝いとして妻・愛子と共に味わうチヌは格別にうまかった。そのうちに、西宮郷の酒までふるまわれて、平野家の屋敷は祝賀一色に盛り上がった。

竜太郎誕生の噂はすぐに大阪中に広まった。

「平野商店に竜が来たらしいゾ」

「青い目の婿はんの次は竜か？」

「昇り竜の平野は一体どこに行く気なんじゃ？」

噂が噂を呼んで、平野商店の名前はいつそう知名度を上げていくのであった。キルビーの経営哲

っている。

当小説の舞台となっている明治四年、この時の日本の人口はざっと三千四百万人。その中でもきわめて珍しい日本と英国の混血の赤ちゃんが竜太郎である。集まった誰もが興味津々で竜太郎の顔を見つめるのも無理はない。大阪の平野家で菊子が特別腕の立つ取り上げ婆さんを依頼しての出産であったが、熟練の取り上げ婆さんでさえ、びっくりしたほど顔立ちの整った赤ちゃんである。ハンターに似て、日本では見られぬほど鼻筋が通った端整な顔立ちの男の子である。

「愛子さん、ちよつと私にも抱っこさせて下さいよ」

タネが竜太郎を抱っこする。気持ち良さそうに目を閉じたままの竜太郎に

「かわいいねえ。イギリスと日本の友好のあかしだよ」

と語りかける。そんな和氣藹々のムードにキルビーは満足である。ハンターより年上の自分自身が妻帯を考えるべきかも知れぬ意識がちらつと頭をかすめる。しかし、今のキルビーは事業に全身全霊を打ち込んでいて、個人的に親しくなる女性とめぐり会う機会もない。

「サア、皆サン、モウスグ、大井肉店カラ牛肉届キマス。スキヤキパーティシマショウ」

走人村の西を流れる宇治川の関門の少し西に最近、「月華邸」とは別の新しい肉店がお目見えしていた。西国街道に面して「大井肉店」と掲げた看板がひととき目立つ店構えであった。四年前の

慶応四年から明治元年にかけて、キルビー商会在日本で初めて牛肉を販売するビジネスを立ち上げ、もともと牛肉を食べる習慣がなかった日本に牛肉を食べる習慣を植え付けたキルビーとハンターであったが、明治二年八月に小野浜鉄工所を開設するのを機に、キルビー屠牛場兼牛肉販売所を閉鎖した。が、二人の活動の後を受けて牛肉ビジネスは日本に定着し、生田川の東にラーボーが経営する屠牛場が出来たのに続いて、日本人が経営する鳥獸売り込み商社も誕生したりして、牛肉文化の輪はしだいに全国へ広がりはじめていた。事実、東京でも屠牛場が造られたり、横浜では牛鍋を食べさせる店が複数誕生して、関西の「すきやき」に對して関東の「牛鍋」が庶民の間に浸透していく兆しを見せ始めたりにしていた。

そんな折りに、走人村の農民、岸田伊之助が十二歳の若々しい感覚を活かして斬新な店を構えたのであった。この大井肉店は繁盛をきわめて、明治二十年ごろに、歴史に残る店舗を建築する。二階建てのバルコニーを持つ洋館で、白い漆喰壁に半円アーチの窓を持ち、ステンドグラスをはめ込んだしゃれた造りで、ひととき一目を引く建物である。この建物がのちに、日本でも記念すべき初期の牛肉店として愛知県犬山市の明治村に移築され、後世に語り継がれていくこととなる。

「ソロソロ、牛肉ガ届クコロデス。稲次郎、炭オコシテ下サイ」

キルビーが言う矢先に、一人の男が十四番館に姿を見せた。小柄でずんぐりと丸い体つきの男性





が荷物を持ってやって来たのである。その体つきから「バケツ」とあだ名されている大井肉店の経営者、岸田伊之助であった。

「大井肉店です。このたびはおめでとうございます」

いかにも商人らしく如才ない。岸田は農業に精

を出す時はボロをまとい、身を粉にして働いた。なりふり構わず働く姿に親しみやすさを覚えて誰いうともなく、このころ水を入れる容器として普及し始めていたバケツをイメージしてあだ名が付けられたのであった。

「オウ、ミスター・バケツ、サンキューベリーマ

ツチ」

キルビーが手を差し出して暖かく迎える。自分がこの国に一石を投じた牛肉文化の普及にこの男が役も二役も買ってくれるのかと思うとキルビーがバケツに期待を寄せる気持ちは当然であった。「ミスターバケツ、竜太郎ノ顔、見テ下サイ」

キルビーが岸田を愛子のいる部屋へ案内する。「えらい評判の竜太郎さん、ひと目拝ませて下さい」

岸田は愛子の腕の中でぱっちり大きな目を開けている竜太郎を一目見るなり

「おう、かわいいい！」

と大きな声をあげ、まあい顔をいつそう丸くほころばせた。ハンターが挨拶する。

「岸田サン、私ノ妻デス」

愛子が竜太郎を抱いたまま、会釈する。

「愛子と申します」

「おめでとうございます。キルビーさんとハンターさんが始められた牛肉ビジネスにあやかっつて、大井肉店を始めさせてもらいました。その張本人の所へこのようにお肉を届けさせてもらうのは嬉しいかぎりです。竜太郎くんのかわいさに応えて、代金は特別に安くさせていただきます」

みごとに機敏な岸田であった。この商人の心意気で大井肉店は地道にその事業を進め、日本の肉店の魁として名声を得ていくこととなる。

岸田は牛肉を届けるだけでなく、自らすきやきを作ることでやり始めた。タネと稲次郎がそれ

を手伝い、うちとけた雰囲気が出たが十四番館に満ちわたる。それ以上に充滿し始めたのはいかにもおもしろい。そうすきやきのおいである。

ほどよいところで、米田が会食前の挨拶をする。「大海原の波濤をけたてて、異国の地にやつて来たハンターさんが、今、確かな命をここに誕生させました。その新しい命にハンターさんは、人間が夢に描いて、現実に見ることの叶わぬ竜を自分の二世として具体化されました。これまでのハンターさんの生き様に敬意を表し、前代未聞の異国のお人との結婚によって周囲の人たちにも大きな影響を与えておられる愛子さんの労もねぎらって、今日は心いくまでみんなですきやきを味わいたいと思います」

その言葉を愛子が胸つまる思いで聞いた。秋月が古武士然として言葉を添える。

「日本女性の鏡として、竜太郎殿を立派に育て上げていただきたい。そのために必要な力添えはここに集まったみんなですさせていただきます」

冬から春へと季節がゆつくりと移りいく居留地の十四番館は、生後二カ月の竜太郎を中心に周囲の善意の絆がいつそう強く結ばれるのであった。

つづく



■三宅杜夫（さんじょう・もりお）  
フリーアナウンサー、放送作家。ルポライターを経て、放送業界へ。経歴にもとづく地域活性化講師としての活動も評価されている。著書に「いのち結んで」「宝の道七福神めぐり」「そうゆう人たち」など。



# 美味より神戸

懐石割烹

なが坂

『守破離の世界を季節感と共に』



落ち鮎の風干し、無花果、銀杏など秋の味覚を織り込んだ八寸



店内はカウンター7席のみ



上品な昆布の風味が、旬の食材を引き立てる椀物

カウンターは7席。素朴な

お店づくりは、まるでご主人・

長坂俊明さんの料理に対する

誠実さを見ているかのよう。

懐石料理の名店として名高い

招福楼で修行をつんだ。「茶の

精神を心とする日本料理」を

謳う、伝統にのっとったその料

理は、椀物ひとつ口にしてみれ

ば想像に難くない。出汁に浮

かぶ鱧は、まるで白い花が開花

したかのように美しく艶がある。

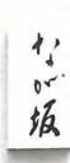
味も昆布の香りと相まって、

芳醇で味わい深い。加えて松

茸の香りと食感も秋の味覚に

華をそえる。「ただ当たり前の

ことを」と長坂さん。丁寧に



☎078-321-0718

神戸市中央区中山手通1-6-5 高ビル1F

【営】 12:00~14:00

17:30~21:30

要予約

【休】 日曜・祝日



ご主人の長坂俊明さん

盛り付けられたその料理は、品格すら感じさせる。口数は少ないが故に、言葉一つひとつに料理への真摯さが伝わってくる。料理人としての守破離の世界を季節感と共に愉しませてくれる。



東門筋を一本東に入る

# 美味より神戸

中国レストラン

蘇州

『眼下に広がる絶景とともに味わう、珠玉の中国料理』

2005年に上海料理のレストランに生まれ変わった「蘇州」。リニューアル前の広東料理のテイストも取り入れた創意工夫あふれる中国料理が好評を博している。この秋、オーブン2周年を記念して、姉妹ブランドホテルヨコハマグランドインター

コンチネンタルホテルの中国料理「驛驛」料理長、田村晃男氏による期間限定のスペシャルイベントが開催される。ともに中華街を擁する街「神戸」と「横浜」のコラボレーション。窓外に広がる神戸の絶景とともに、グルメなひとときが存分に堪能できる「食の秋」にふさわしいイベントとなっている。



ヨコハマ グランド  
インターコンチネンタル ホテル  
「驛驛」料理長 田村晃男



極上のフカヒレ刺身が楽しめるディナーコース

中国レストラン 蘇州 2周年記念スペシャル

田村晃男の“味と技の世界”

10月12日から21日まで

ランチコース ¥4,620 (税・サービス込)

ディナーコース ¥12,705 (税・サービス込)



☎078-291-1122

神戸市中央区北野町1

クラウンプラザ神戸 34F

【営】 11:30~14:30

18:00~21:30 (土・休前日は22:00まで)

【休】 無休

<http://www.cpkobe.com>



10月14日(日)は田村料理長来店。





店内のフロアから、湧き出したかのような花々。ダイナミックかつ繊細に活けられ、全ての客席から視界に入り、見る者の心を癒してくれる。北野坂に面したFビル6Fにあるクラブ「ロダン」は、オープンして3年目を迎えた。「お客様に納得していただける、綺麗な女の子達がそろっています。夢心地を華やかな空間でお楽しみ下さい」と野田恵子ママも自信をもって話す。

## information

**ロダン**

☎078-322-0308

神戸市中央区中山手通  
1-8-14 Fビル6F

■ 営業時間 20:00~24:30  
■ 定休日 日曜・祝日



■ 座席 30席  
■ 料金 16,000円(80分)~



花々が香る空間で  
夢心地をお楽しみください



ロダン

野田恵子さん(右)  
みきさん(左)



東門筋を二本東に入ったサントモビル3Fにあるラウンジ「ローズブルー」。今年8月には、店内をリニューアルし、上品な色使いの大人っぽい雰囲気。松原さやママは、人懐っこい笑顔と明るさが魅力の美女。「お客様にとって、心の拠り所となるお店にしたい」。ママの笑顔と饒舌なトークに癒されるお客様さんも多いとか。ヒューマニティあふれるお店である。

### information

#### ローズブルー

☎078-321-9785

神戸市中央区中山手通  
1-7-3 サントモビル3F



■ 営業時間 20:00～翌1:00 ■ 座席 25席  
■ 定休日 日曜・祝日 ■ 料金 13,000円(120分)

笑顔と饒舌なトークに癒される  
ヒューマニティあふれるお店

ローズブルー

川原かおりさん(右)  
松原 さやさん(左)